

関西学院大学 研究成果報告

2022年5月31日

関西学院大学 学長殿

所属： 社会学部
職名： 教授
氏名： 鈴木 慎一郎

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	ポスト・パッケージとポスト・マスメディアの時代のレゲエ音楽に関する研究—カルチュラル・スタディーズの新展開をふまえて—
研究実施場所	自宅、大学の個人研究室
研究期間	2021年4月1日 ～ 2022年3月31日（12ヶ月）

◆ 研究成果概要 （2,500字程度）

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究が志したのは、カリブ海地域ジャマイカ発のポピュラー音楽であるレゲエの1990年代半ばから2010年代末までの四半世紀における変化を焦点とした、文化史的・文化誌的研究である。この時期を中心的に扱うことにしたのは、主に以下の2つの理由による。第一に、同国のポピュラー音楽の歴史に関しては、従来の学術的著作とジャーナリズム的著作の双方において、1990年代半ば以降の展開についての記述がいまだに手薄な状態にある。記述が集中しているのは1960年代から1980年代までの3つのディケイドであり、とりわけ1970年代における展開については知見の蓄積が豊富である。このことは、レゲエがポピュラー音楽の国際市場において認知を獲得したのが1970年代であったという事実を考慮すれば、正当化されうる点をももちろん含んでいる。しかしながら、この音楽が誕生してからすでに半世紀以上の時間が経っていることをふまえれば、歴史記述における集中は徐々に弱められていくべきであろう。第二のより重要な理由は、1990年代半ばから2010年代末までの四半世紀が、ポピュラー音楽史およびメディア史における決定的な移行が地球規模で進んでいった時期に他ならないという点にかかわる。この移行とは、ポピュラー音楽研究においていわれているところのポスト・パッケージ時代への移行であり、また、メディア研究においていわれているところのポスト・マスメディアの時代への移行である。「ポスト・パッケージ」（パッケージの後）という把握の仕方は、レコード盤やカセット・テープやコンパクト・ディスクのようにフィジカルな形式でパッケージ化された音楽ソフトの生

産や流通が最盛期を過ぎて、音楽聴取はデータ・ファイルを「参照」する形で行われることが日常化した、という歴史意識にもとづいている。また「ポスト・マスメディア」（マスメディアの後）という把握のほうは、ソーシャル・メディアに代表されるように送り手と受け手が固定されないメディア環境が遍在化した、という歴史意識にもとづいている。どちらの把握の仕方に関しても、近年におけるカルチュラル・スタディーズの展開が有益な知見を準備してくれるであろうと考えられた。

以上のような志のもと、本研究では、主に以下の3つに整理できるような作業を行った。第一に、1990年代半ばから2010年代末までの時期を中心とし、それに至る時期のものも含め、実際にリリースされた録音物を聴取し分析するという作業である。「リリースされた録音物」には、パッケージ化された音楽ソフトとしてレコード会社から発売されたものだけでなく、とりわけ2010年代に制作された録音物については、ソーシャル・メディアや動画共有プラットフォームをつうじて発信されたものも含まれる。第二の作業は、当該の時期のレゲエの展開を実際の事例として直接に論じた、カルチュラル・スタディーズ、ポピュラー音楽研究、メディア研究、文化人類学、社会学などの分野における諸著作についての検討である。第三の作業は、この音楽の実践者、関連する諸産業の従事者、そして個々のファンが、当該の時期におけるこの音楽の変化についてどのように語っているのかを、インターネットでの発信から分析するということである。

これらの作業を通じて本研究では、ポスト・パッケージおよびポスト・マスメディアへの移行期におけるレゲエ音楽の変化を有意義な形で記述していくためには、少なくとも以下の3つの視点がとりわけ重要となるであろう、という知見に至った。

第一に、表現の自由と公共性をめぐる論争への視点である。ジャマイカのレゲエ音楽においてこの論争はとりわけ、同性愛者に向けられた暴力的表現をめぐっての論争という形で、1990年代初めから2000年代にかけて先鋭化した。しかしながらより近年では、ジェンダーやセクシュアリティにおける少数派であることを公言しているジャマイカの音楽家も一定程度存在するという状況がみられる。この点における変化の背景としては、次のことが考えられる。多国籍メジャーのレコード会社をつうじて流通するポピュラー音楽とその諸実践においては、「多様性への寛容」という価値が今日では一般化しているといつて差し支えないだろう。そしてジャマイカの音楽家たちも、それらのメジャーからの音楽を日常的に聴取したり、また時にはメジャーの録音物の制作において協同したりすることで、多様性への寛容の度合いを以前よりも高めているかもしれない。しかしながら、2010年代のソーシャル・メディアの普及はいっぼうで、ジェンダーやセクシュアリティにおける少数派への過激で憎悪的な表現がいつそう可視化されるという状況とも結びついている。LGBTQ当事者が声高に権利主張を行うようになったのはグローバリズム的価値観がジャマイカという小国に「侵攻」した結果である、という構図による把握は、すでに1980年代末にはジャマイカの音楽家の間にみることができた。そしてこうした把握の仕方は2010年代にも継続していたことが確認できる。

第二に、レゲエ音楽についてさまざまな主体が行おうとしている文化資源化と、それをめぐる政治への視点である。この視点に大きくかわる近年の最も重要な動向は、ユネスコ無形文化遺産へのこの音楽の登録が2018年に決定したことである。ジャマイカ国内に限っても、政府、音楽産業、観光産業、教育界などにおける、それぞれ多様な位置にある諸主体が、この音楽とそれをめぐる文化を資源として捉え、何らかの利益や効用を得たり得なかったりしている。この視点においては、資源化のそれぞれの企図に際して、当該の文化の総体における何が、どのような構造的位置にある主体によって、どのように取捨選択されるのか、という意味での、政治への問いが必要不可欠であろう。言い換えれば、資源化されなかったもの／され得なかったものに注意を向けることが有益である。

第三に、レゲエ音楽の真正性をめぐる言説の、再編制への視点である。1990年代から2000年代末までの時期について特に指摘できるのは、レゲエと英国の諸都市のクラブ・シーンに直接の起源を持つ電子楽器中心のダンス音楽（ジャングル、ドラムンベース、グライム、ダブステップなど）とのハイブリッド化が進行したことである。2010年代にはさらに、トロピカル・ハウス、トラップ、アフロビートなどの音楽と、同時代のジャマイカ音楽との間に、一定の相互的な影響関係を見ることができるといえる。レゲエをジャマイカの真正な文化と

して資源化する立場は、こうした継続的なハイブリッド化の中で、言説をどのように再編制するのか。この点への注視は今後ますます有意義なものとなると考えられる。

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。